

2、時には休みを

太田川にも、桃花水が、みなぎり流れる季節がやってきた。三日の節句は過ぎたが、このころになると、川辺のよもぎを摘んで草もちをつくり、桃の花をそえておひな様に供えた往時の節句が思い出される。

節句、それは節供とも書かれることでわかるように、作業の一段落した節目に、仕事を休み、神に食物を供えて祈る日であった。この仕事の節目に休む習俗が、そのまま節度ある生活の慣習となっていたものであろう。

節度ある生活とは、一息いれて休みながら山登りするようなものである。ときに休みをとりながら頂上を目ざせば、無理なく無事に目的地に達することができよう。人生も同様で、一息いれて休むことが大切である。休むとは、自らをふりかえりみることで、つまり内省することをいう。内省することを忘れて、しゃにむに突き進めば、取り返しのできない失敗を

つれづれの思い



昭和47年 国文学会南紀研修旅行

しでかすことになるやもしれないのである。

顧みると、昭和の六十年間は激動の時代であった。その初期から十年代には、満州事変、日中戦争、太平洋戦争とがむしやらに軍事大国への道を突き進んだ。その結果は敗戦というにがい経験を味わったのであった。申すまでもない、内省することを忘れて目的を見失ったためである。

次いで、戦後の三十年代から四十年代には、所得倍増論をきっかけに高度成長期に入り、経済大国への道を突っ走った。しかし、石油ショックで急ブレーキがかかり、その基盤のもろさを露呈してしまった。いうまでもない、これもまた、内省することを忘れた結果なのである。

今、昭和は還暦という節目を迎えた。このとき、再び過去の過ちを繰り返してはならないと思う。ことに産学・官が、科学技術開発大国への道を進めているときであれば、なおさらその感を深くする。まことに、この道は、先の軍事、経済大国のときのような過ちは許されない。過てばそのまま宇宙・人類は破滅するからである。

ゆったりと桃花水が流れる春の太田川河畔に、今は節句を楽しむ姿は見られない。しかし、内省し神に祈るといふ節句の心は、未来永劫に忘れてはならないであろう。なぜなら、それは、二十一世紀に生きる人間が遭遇するかもしれない危機を、未然に防いでくれるであろうからである。私はそう信じている。

中国新聞（夕刊）・土曜時評（昭・60・3・9）